金子翁

福沢桃介著「財界人物我観」より

四国の南端、薩摩嵐のそよ吹く土佐の国は、我が財界に二大偉人を送った。一は岩崎彌太郎、一は金子直吉だ。彌太郎は、人も知る通り現今三井と並び称せられる世界的富豪三菱の鼻祖、時代が変ってるとはいうものの、彼が死んだ時の三菱の財産は精々約二千万円その事業は三菱汽船会社（後の郵船会社となる）、高島炭鉱位のものであった。

之に引換え鈴木商店即ち金子の事業は、到底彌太郎逝去当時の三菱の比ではなかった。日本に於て他の追従を許さざるのみならず、世界の桧舞台に押出しても当然ファースト・クラスに伍するものであった。即ち鈴木の支配下に於ける事業と投資額は、ザット次の通り。

	万円		万円
製鋼製鉄業	4,000	倉庫業	600
造船業	3,000	開墾埋立	650
人造絹糸工業	3,500	燐寸業	300
製油（大豆油）工業	1,000	塩業	300
硬化油工業	600	支那煙草業	200
樟脳事業	600	南洋殖林業	200
薄荷事業	200	西伯利亞木材業	400
窒素工業	600	セルロイド工業	100
製錬業	3,000	ファイバー工業	100
石炭業	2,700	ゴム工業	100
汽船業	3,000	レザー工業	100
製糖業	1,000	乾溜工業	400
石油業	1,000	保険業	100
製粉業	1,000	染料工業	100
毛織業	500	繰綿工業	150
紡績業	700	無線電信業	100
酒類（麦酒,焼酎業）	700	漁業	100
		計	32,100

投資額約三億二千百万円、会社五十余、これだけの膨大の資本と会社を、五千万円の合名会社鈴木商店と五千万円の株式会社鈴木商店で動かしていたのだ。そして、製造工業やその他の事業の他に、世界を跨にかけて我が輸出入貿易の大半を取扱い、一年の商売高は十億を算し、大正八～九年の全盛時代には十六億に上ったという。

三井物産の昭和三年に於ける商売高は十二億六千万円で、会社創立以来の最高記録であったが、大戦前後は十二億円位だったから、当時はさすがの三井も鈴木には及ばなかったと見える。当時、スエズ運河を通過した船舶積荷の分量からいっても、鈴木関係は約一割を占めていたそうだ。そして、大戦中に鈴木の手で正貨を我国に吸集した額は、おおよそ十五億に達した。以って、鈴木が我が国際貸借に偉大なる貢献をしたことがわかる。

のみならず鈴木は、人造絹糸、製油、樟脳再製、窒素工業の如き我国に必要な基礎工業にも先鞭をつけた。その英雄的行為は、驚嘆するに余りあるではないか。

ナポレオンは、モスクワの戦に一敗地に塗れて、遂にセントヘレナで悶死したが、矢張り彼は歴史上の偉大なる英雄たるを失わぬ。それと同じく、昭和二年四月若槻内閣当時、例の金融動揺に遇って、鈴木商店は脆くも没落したが、主脳者金子は我財界に於けるナポレオンに比すべき英雄だ。

由来、実業家に婦人道徳は不向きと相場が定まっている。君子人を以って目せられた莊田平五郎でさえ、清浄無垢の人ではなかったようだ。然るに、金子はオギャーと生れて六十三歳の今日に至るまで、女房の外に道楽の味を知らぬという聖人である。

英雄すでに不出世、聖人に至っては尚然り。いわんや英雄にして同時に聖人たる金子の如きに至っては、幾百幾千年の間に、二人を求めることは無理であろう。

以上を前置として、ソロソロ金子を批判して見よう。

金子は慶応三年六月十三日、土佐の吾川郡名野川村に生れた。五～六歳の頃、父が高知に移り住むことになり、金子も伴われて高知の人となった。長ずるに及んで、近所の質屋に丁稚奉公にやられた。偶然ではあったろうが、金子の商売のアウトラインは、実にこの質屋奉公中に会得したものだ。

質屋稼業は、仲々頭の働きを要する。質を取る瞬間に、この品物は自分のものであるか、借りて来たものであるか、或は盗品ではないかという点を注意し、それからこの品物にいくら貸してよいか、流れた時はどうしたらよいかというようなことを胸算用で直ちに計算せねばならぬ。しかし、鋭敏なる頭脳の持主金子は、日ならずしてこの道を覚え、質を置きに来る人の品物の出し振りで、質屋通いは初めての人か、又は二度も三度も度々質入れする人であるかを、容易に判断出来るようになった。後年金子の直話に依ると、職人とか月給取が質屋通いをしても、それが為に身を誤るようなことはないが、小間物屋とか魚屋とか八百屋とか小商売をする者が質を置くようになったら、おそくも三年を待たずしてその家は潰れるそうだ。その真理を、金子は幼少の頃すでに体験しながら、後年鈴木商店経営に当って、大借金をして、主家を潰したのは、酒呑みが酒の害をしりつつ、ツイ深呑みして健康を害し、一命を棄てるに至ると何等変る所がない。

金子の教育程度は、お話にならぬほんの寺子屋式の教養を受けただけだが、根気よき彼は、質屋奉公中質物の書籍を片端からぬすみ読みして独学勉強したものだという。殊に、孫子を好み、熟読玩味、よくその大体に通じ、これを後年商売上に応用して大に儲け、又蘇張の弁を揮って人を説破するなど、徐々に成功の素因を作ったものだ。

しかしながら、洋食の料理は菜切包丁では駄目だ。矢張りナイフでなければならぬ道理だ。それと同じく、今日の事業商売は、すべて西洋流の組織立った経営法に依らざれば旨く行かぬ。そこを金子が、孫子の骨法で万事を押し通うそうとしたのが、抑々手違いのもとになったのだ。

それは後の話で、金子はそうして質屋奉公をしていたものの、田舎にいては出世が出来ぬと考えて、二十か二十一の頃、神戸の砂糖商鈴木岩次郎の店へ入って番頭になった。その後、明治二十六年、金子の二十七の時、主人岩次郎が死んだので、後家のおよねサンを主人として、相番頭の柳田富士松と鈴木商店経営の任に当った。当時、鈴木の財産は、約九万円位だったというから、岩崎（彌太郎）の死んだ時の二千万円とは、テンデ較べものにならぬ貧弱さであったのである。

主人岩次郎が死に、そうこうしているうちに日清戦争が始まり、これも済んで明治二十九年に、台湾が我が領土になって、日本の兵隊がキールンに上陸したという電報がロンドンに入った当時のこと、英国人『ノース』という海軍士官の古手の大相場師が、樟脳の大買占めをやったために、百斤四十円位のものが、結局は九十五円位になった。その頃鈴木商店は、砂糖と樟脳の商売をしており、砂糖の方は柳田、樟脳の方は金子が担任していた。

金子は『ノース』が樟脳の買占めをしたことを知らず、樟脳が高騰したのを見て、好機逸すべからずと、四十円から外国商館へ先物の売約をした。ところが、段々相場があがって七十四～五円にもなった。この値上りで、鈴木商店の損失は莫大のものとなり、若し契約通り実行したら、鈴木商店は全財産を放り出しても、まだ足らぬという破目

に陥った。一方、各商館からは品物を早く渡せという矢の催促が来る。さすがの金子も進退きわまり、独り帳場に座って、算盤を前に置き、腕組みして沈思熟考に耽った。鈴木の店は、普通のその時分の店と同じ構造で、奥から格子戸一つ開けると店まで見通しが出来るようになっていた。およねサンは、奥に居て遥に金子の思案投首萎るるばかりの風情を見て、多分現金と帳面の辻褄が合わぬので悩んでいるのだろうと推測し、金子を呼んで、『直吉どうしたのか、金が足らないなら、少し位は奥から足してあげよう』といって慰めた。金子は、お家の浮沈に関する一大事、最早や隠すに隠されぬ瀬戸際になったので、実は斯々の次第と、一部始終を打開けてひたすら詫び入った。太ッ腹のおよねサン、腹を立てる所か小言一ついわず、そうなったら仕様がない、善後策を講じようと、当時大阪の北浜で善い顔であった西田仲右衛門というよねの兄で鈴木の後見人をしている人を訪ねて相談した。西田も一人ではよい分別もつき兼ねたと見えて、先代鈴木と別懇の間柄だった大阪の砂糖商藤田助七を呼んで、西田、藤田、よね、金子の四人額をあつめて善後策を相談した。その時西田は金子に向って、善後策と併せてお前の一身上のことも相談するから、暫く遊んで来いといわれたので金子はその場をはずしてブラリと出かけ、安治川橋の傍ら藤澤彌三郎という店に立寄った。安物の樟脳を掘り出して幾分でも損の穴埋めを思い立ったからだ。店へ入って、素知らぬ顔で売物がないかと聞くと、あることはあったが、タッタ今七十五円で皆売ってしまったとの返事。金子は吃驚、しまったとは思ったが仕様がない。それから肥後橋の福永次郎兵衛を訪ねたが、そこでも今相場が八十円に上ったと聞いて二度吃驚。ところで、東京の銀行屋で樟脳を担保にとっている肥田景之が花屋旅館に滞在していることを思い出し、肥田ならば素人だから相場の上ったことは知るまい、甘く話しかけて同人が神戸の住友倉庫に入れてある樟脳を手に入れようと、花屋で肥田に会って話している最中に、神戸の住友から電話があり、樟脳が又々暴騰して、八十円より上になったとのことで、金子は開いた口が塞がらず、三度吃驚、左様ならと肥田に別れを告げて外へ出た。

もうこうなっては運の尽きだ。樟脳を探すより何か気分を転換せんものと、苦しい時の神だのみ、天満の天神様に参詣して、無事難関切抜けの祈願をかけた。それから庭園の中にある池に臨み、鶴に鰌をやったり、鯉に麩をやったりして、嗚呼もう人間やめて、この鶴や鯉になりたいと熟々嘆息した。彼れ是れするうちに日も西山に沈んだので、もうよかろうと西田の店に帰って見ると、三人の話が済んでいて、君は仲々大きい損をしてくれたものだ、これは自分等が神戸に行って処理する筈だが、樟脳の事は自分等より君の方がよくわかっているから君に任せる。出来るだけ損失を少くして解決せよと申渡された。この時は最初西田に相談した時よりも樟脳が高くなっており、遥に損失が大きくなっていたけれども、もう金子は西田に話す勇気もなく、其の儘お受けして神戸へ帰った。

そこで金子は、一層責任の重大なるを感じ、粉骨砕身難局切抜けを決心し、谷禎造という人を以って、住友に掛合ったら、住友も同情して、破格の値段で品物を買受けることが出来た。まず一安心と思っているところへ『オットライマース』の弁護士から書面で品物引渡しに就ての厳重な催促を受けた。当時、鈴木の最も多量の売約先は『シモン・エバー』だったから、まずこの商会を口説き落すに如かずと、この弁護士の書面を持参し、短刀を懐にして、同商会に行き、『シモン』に面会して、かく八方から責められては鈴木は破産する外ない。平生

引き立てて下さる貴商会に出来るだけ義務を尽そうと思うが思うに任せぬ。僅かの品物と三千五百弗で勘弁して頂きたい。出来ぬとあらば主家鈴木に対しこの金子が申訳なし、この場に於いてハラキリ（当時金子はまだ純心の青年だったから、本当に切腹の決意があったともいう）をやるまでだと、金子得意の富婁那の弁舌で『シモン』を口説いた。『シモン』も金子の熱誠に動かされたと見え、幸いモスリンの商売で思わぬ儲けがあったから、之を以て鈴木の契約不履行に由る損を補塡するが、尚五千弗足りないから出せという。金子は三千五百弗に負けてくれという。彼れ是れ押問答の末、四千弗でけりがついた。是で成功した金子は勇気百倍、同じ手で『オットライマース』その他をすべて片付けて仕舞った。

自分の方の商売の失敗は、ひとまず片付いたので、油が乗って来た金子は、肥後橋の福永が、矢張り樟脳を『ラスペ』に売約して困っているのを口をきいて仲裁してやった。そして円満に片付いたので、謝礼として福永から三千円、『ラスペ』から三千円、都合六千円貰った。樟脳の失敗で鈴木商店は現金一文なしになったのが、この六千円を資本として、再び商売を続けているうちに、運よく金儲けが出来て、三十年六月には十万円位の銀行預金が出来た。この十万円が活躍して鈴木商店が大をなす基になったのだ。

不二樹熊次郎、この男は大阪桜の宮の日本製糖会社の専務をしていた男だが、単にそういったのでは通りがわるい。当時、大阪南地に盛名を馳せた名妓八千代の旦那兼色男の不二樹サンといえば、天下知らぬ人はなかろう。鈴木商店は、前にも話した通り、当時砂糖と樟脳が商売だから、不二樹とも商売上の交渉があった。ところが、不二樹の会社から砂糖を買うには、不二樹をお茶屋へ招いて、八千代を同席させて款談しなければ話が旨く運ばぬ。品行方正の金子にはお茶屋入りなどという世間並の芸当は出来ない。勢い商売がしにくい。そこで、ひとつ自分で製糖会社の設立を思い立ち、三分の二は鈴木、三分の一は藤田助七が出資して、門司の傍の大里に工場を建てることにした。不二樹始め製糖事業関係の者達は、大里の水には『アムモニヤ』が一杯あるから工場が出来上っても砂糖は出来まい。結局、工場は潰れて、鈴木の連中は可愛相に石と煉瓦を抱えて大里を引上げるであろうと嘲笑していた。金子はこれに屈せず、遂に立派な工場を打ち建てたが、さて運転開始の段になると、不二樹の祟りかフジキにも、砂糖が固まり勝ちで、東京や大阪の製糖会社で出来るようなものが出来ない。従って、製品が高く売れない。

この固まり勝ちの原因を、段々調べて見ると、これは『ヂスインテグレーター』という砂糖を攪拌する機械に欠陥があり、且つ運転に不熟練であったことが判った。

この機械の名称に就いて、面白い話がある。金子は英語に通じないから、教えた人が誤ったのか金子が聞き違えたのかこの機械の名を『レキセンリグレット』と覚えた。そしてこの機械の扱い方を知る為に京都大学に行って、某博士に面会した。ところが、『レキセンリグレット』という機械はないという。金子はあるという。押問答の末、それが『ヂスインテグレーター』の誤りであることが判った。けれども、負け惜しみの強い金子は、『ヂス』でも『レキ』でも要するに発音の相違に過ぎない。現に米国人はポールモール（紙巻煙草の一種）と呼ぶが、英国人はペルメルと発音するじゃないか、と当意即妙をやってのけたので大笑いをした事がある。

さて、この原因は判ったが、それを改善する技師も職工も大里には

いない。金子は大いに弱って外国へ電報して西洋人を雇い入れようと決意した。そこへ、或る日一人の職工らしい男が訪ねて来た。金子が何事だろうと会って見ると、その男は滔々と砂糖の製法を話し出した。まず砂糖製造の秘訣は、糖蜜の色素を去り無色透明にして、之に硫酸を加えて葡萄糖に変化する、これを『ビスコ』という、この流動体を下からポンプで押し揚げて、霧の状態に於いて吹き込む……などとやり出し、加えて『ヂスインテグレーター』の運用効能を詳細に説明した。金子は『天使来る』とばかりに喜んで、どうして此処へ来たか、何処から来たかと尋ねると、又その返事が振っている。『実は自分は桜の宮の精糖工場におって、永年この機械を扱っていた職工だが、先日不二樹専務が工場へ来られた際、ポケットから一枚の写真を取落して行った。自分は何心なく拾い上げて見ると、頗る美人。聞けばこの美人が八千代という専務寵愛の芸妓だとのこと。自分等は職工ではあるが、一生懸命に事業の為に働いているのに、専務は芸者遊びをして、しかもその写真を懐中して恍惚けているとは沙汰の限りそういう人に仕えるのは潔しとしない。之に反して、大里の主脳者たる貴下は、品行極めて方正で、真面目に事業の為に奮闘しておられることを知り、貴下の人格を慕い、貴下の下に働きたいので、桜の宮を暇取って来ました』と、諄々として説き去り説き来るその態度の熱心なるに、金子は大いに喜んで早速その職工を重用し、終に桜の宮に優るとも劣らざる優良品を作り出すようになった。

この大里工場は、明治四十二年六百五十万円で大日本製糖に売って、鈴木が一躍千万長者になったことは、世人周知の事実である。因果は廻る小車の、品行方正で砂糖製法問題を容易に解決した金子が、後年その品行方正に崇られて主家を潰そうとは、金子自身も知らなかったであろう。

大里製糖の売却に依って、一躍金持になった鈴木は、その後たいした波瀾もなくて、順調に発達した程度のものであったが、大正三年欧洲戦争が始まって、我財界が奈落の底に突き落されたとき、金子は一種の霊夢に感じたものか、その年の十一月頃、大戦の結果として世界の商品殊に軍需品は、必ず暴騰するという判断の下に、当時の会計主任の日野に命じて鈴木の財産と信用を利用して出来るだけ金を拵えさせた。そして、すべての商品船舶に向って買思惑を建て、ロンドン、ニューヨークを始めとして、支那、欧米各地に支店出張所を設けて、業務の大拡張をした。当時世人は、金子のこの冒険的挙動を見て、金子は気狂になったのかと笑った程であったが、金子の先見の明違わず、翌年二月頃から商品が暴騰し始めて景気が立ち直った。これが鈴木大当りの第一歩で、その後一万屯級の貨物船三艘を三菱造船所に注文して世間をアットいわせたことがある。四年、五年も続いて順風に帆を揚げた勢い、六年頃には鈴木の財産は一億二億を以って唱えられるようになった。

この時金子は、鉄と船との大思惑をやっていたが、同年の初夏、米国は俄に鉄の海外輸出を禁じた。これが為我国の造船業者は勿論、一般が大狼狽をした。この時まで、余り世間に顔出ししなかった金子は、やむなく陣頭に現われて活動することになり、神戸オリエンタル・ホテルに多数同業者を集めて同盟会を組織し、大いに世論を喚起して、米国政府を動かし、鉄の輸出解禁を実行せしめることに努力した。政府もまた、逓信省、外務省の手を経て、駐日米国大使に掛け合うやら、駐米日本大使をして米国政府に談判せしめるやら、あらゆる手段を講じたが、どうしても要領を得なんだ。

そのうち、六年十二月に米国大使ローランド・モリスが新に日本に

赴任したので、浅野總一郎がこの人に談判した。けれども、矢張り不成功に帰し。それから外務省と逓信省とが連合で交渉したけれども、これまた不成功に終った。

モリスは、米国で破産管財人などを務めた法律家で、立派なゼントルマンだということを金子は知っていたので、この人ならば我に口説き落す妙策ありと、七年二月外務大臣後藤新平の紹介状を貰い、頭本元貞を通訳としてモリスに談判したところ、僅か一時間にしてこの問題が解決した。これが即ち当時やかましかった船鉄交換である。

ドイツは表面強く見えて、内実窮状に陥っていた。これを知った金子は、近く戦争が終息するという見当をつけ、商品をドシドシ処分したので、茂木は倒れ、久原等は傷付いたにも拘らず、鈴木は比較的旨く始末をつけることが出来た。

又戦後、ドイツは食料品の大欠乏を告げているのを知って、金子は麦粉を日本から、小麦をウラジオ、大連、アルゼンチンから、砂糖を日本、ジャワからとドイツに送った。当時、鈴木の信用は盛大なもので、電報一本で二千万円程度の商売をなし、英国の有力銀行から何千万円というクレジットを得、又その取扱貨物の大数量は、総ての定期船を利用した外にその積載船は、大正八年には九千屯級三十艘、大正九年には四十五艘の多きに及んだということである。

大正九年、帝国海軍の八々艦隊建造の議案が可決され、製鉄造船業に、又々花が咲き始め、鈴木関係の神戸製鋼所、播磨、鳥羽の造船所もまた活気を呈することとなった。また、大正九年の始め頃、ジャワ糖の思惑で、一挙六千五百万ギルダーの大儲をした。即ち鈴木商店は、戦争中にも当り、戦後の後始末も旨くやり、対ドイツ食料品の輸出、ジャワ糖の思惑等で着々成功したのである。けれども、百戦百勝の楚王項羽が、最後の一戦に敗れた如く、大正十一年二月、ワシントンに於て調印せられたる軍縮会議は、百雷の一斉落下、再び起つ能はざる大打撃を鈴木に与えた。

之に先立って締結された巴里平和会議は、この軍縮会議の導火線ではあったが、単に表面上平和を口にするに過ぎずと見做され、我国は八々艦隊の建造を決し、世界各国もまた軍備の大拡張を目論んだので、金子は勿論世界の軍需品供給者は、戦争の再発を密かに期待しておったのであるが、この軍縮会議で一切の計画は夢となった。

後年、英国ビッカースの社長が、日本へ来て、大正八年六月の平和条約よりも、十一年二月の軍縮会議の方が恐しかった、その結果、ビッカース会社も、一挙一億円の損失切下げを断行せざるを得なくなったと痛嘆し、金子もまた『エライ目に逢いました』と、敗軍の将互に過去を述懐して、冷い握手を交したという。爾来鈴木の業務は振わず、遂に昭和二年四月には巨木の倒るる如くに没落した。

項羽は戦に敗れて『騅逝かず騅逝かず、奈何にすべきや、虞兮々々若を如何せん』と嘆声を発したが、それでも項羽には虞美人があって、多少の慰めとなった。金子には慰めてくれる美人とてはなく、脛を抱いて徒に華かなりし過去の夢を追うに過ぎなかった。実業家の風貌も、二代三代となると、自然鍍金がのって、綺麗にもなれば、品も出来るが初代の御面相はお話にならぬ。澁澤榮一、大倉喜八郎、古河市兵衛、根津嘉一郎等何れも皆しかり。殊に、金子と来ては抜群なものだ。

金子は身の丈五尺二寸五分、体量十五貫八百匁の中肉中背、この方はマアよいが、口は大きく鼻低く、眼は小さくて、しかも六度の近眼だ。加うるに色飽くまで黒く、まるでインデイアンのようだ。とも角、人並み外れた醜男である。

先代岩次郎が死んで、およねサンが後家主人になった。もし、金子にして普通の御面相ならば、恐らく妙な噂が立ち、それが為鈴木の経営上にも支障を来たしたであろうが、醜男の有難さで、そんな風評はフツと無かった。

醜男でも、朝吹英二のような道楽者もあったが、金子は巳むを得ずに諦めたものか、度々述べた通り極めて品行方正、この点に於いては確かに人間放れがしている。

或る日金子は一日の仕事を終えて、神戸の店から須磨の自宅へ帰ろうと電車にのった。車中で、一人の婦人がお辞儀をしたから、金子も挨拶を返した。電車を降りて坂道を上ると、その婦人もついて来た。その時には、別に何とも思っていなかったが、家に近づいて始めてそれが自分の妻君であったことに気がついたという。

金子は朝起きるから、夜寝るまで、仕事の外に何一つ考えない。女房の顔を見忘れるのも無理はない。女房を忘れる位は、まだよいとして、仕事の為には時に自分を忘れる。いつだったか、近所の床屋へ飛込んだ時のこと『旦那たった二時間程前に剃ったばかりじゃありませんか』といわれてハット気がつき慌てて飛出した。それが往々の事だという。最も、金子は、何かムシャクシャしたことがあると、今剃ったばかりでも何でも、時を構わず床屋へ飛込んで、床屋の親爺を驚かす妙な癖があるにはあるんだが……。

話は違うが、女房の角は、何とかで折るという喩がある。夫婦喧嘩をしても、翌朝になるとお互いに笑顔で対うのは何の為か。

君子の交りは淡きこと水の如く、小人の交りは濃きこと油の如く、護謨糊の如し。水なるが故に、サット流れて跡をとどめぬが、油なるが故に、護謨糊なるが故に、くっついたら最後放れない。男女の関係、人間相互の関係もまた斯の如く、醜い経緯が両者を結びつけるに最も強力なるクサビになるのだ。高野師直、鹽谷判官、桃井若狭の三角関係を、お芝居で見た人は、成程と合点が行くであろう。

今も昔も、人情には変りがない。近代に於いて各務鎌吉、原田二郎の如く、黽勉力行勤倹貯蓄に依って事業に成功し、資産を作ったものもないではないが、世間を驚かす程の大資産家、大事業家にして、君子の交りは淡きこと水の如しと澄ましこんで、マンマと成功したものが、何処の世界にあろうか。

金子は、婦人の愛情が何処から湧出するかを知らない。従って、俗界に処するには、汚ない媒介物が必要だということを御存知ない。世界を股にかけて、あれ程大きな商売をし政府関係の台湾銀行、並びに同行を通じて日本銀行から莫大の借金をしながら、鈴木の財産信用と自己の弁舌の力を以ってなし得たものと信じ、あらたかな要路の生神様へ然るべくお賽銭を上げて置くべき事を念頭にかけなかった。それが鈴木没落の最大原因である。

金子は、政治家に知人が多い。殊に台湾で砂糖樟脳等の事業に関係した故か、後藤新平と親交があった。又同郷の誼とでもいおうか、濱口雄幸とは最も親密の間柄だ。後藤が逓信大臣になった時、濱口は後藤の下に次官となったが、両者を接近せしめたのは、全く金子の力である。又濱口が同志会――今の民政党――の党人になったのも金子の勧説に依る所だ。

この様に金子は、後藤、濱口と親戚以上の付合をしていたが、一度だって自腹を切って芸者を世話したことがない――尤も、後藤はそうでもないが、濱口に芸者をといったら恐らく絶交するだろう――いわんや、後藤が政治運動を始めるといっても、濱口が寒嚢をはたいて国事に奔走していても、さぞかし御不自由でしょう、と気を利かして一封を献上するような粋なことはしない。ただ親交があったというだけのことだ。

だから、皮肉にも濱口ピカ一の若槻内閣当時に於て、金子が没落したのだ。もし、金子にして、民政党の党費に、百万か二百万の端金でも出していたならば、それこそ憲政の大恩人として、濱口はとも角、他の民政党の連中が放って置かない。寄ってたかってあらゆる手段方便を尽して、金子を助けたであろう。このお賽銭を出してなかったばっかりに、荒神様の御霊験なく、見す見す見殺しにされたのだ。

私はこの程、名古屋の友人に遇って色々世間話の末、こう世間が物騒になっては、東京の大銀行とても安心出来ぬから、名古屋の愛知銀行、名古屋銀行等に分けて預金してはどうかと話した。所が彼の曰く、とんでもないことだ。名古屋の銀行家はケチでお賽銭をあげないから、愈々という場合には見殺しになる。それに反し東京の大銀行は、普断お賽銭をあげているから、いざという瀬戸際には日銀なり政府が助ける、だから矢張り東京の大銀行の方が安心だと。何と諸君、時幣を穿ち得て妙ではないか。

金子は、主家を潰し、台湾銀行に迷惑をかけた。とはいうものの、台湾の樟脳製造法に改良を加え、樟脳薄荷の輸出販路を開拓し、欧州大戦が始まるや、政府をして戦時海上保険補償令を発布せしめ、輸出貿易の円滑を図り、船鉄交換に成功し、十五億の正貨を海外から吸集し、国家に必要なる基礎的工業の基礎を確立する等、国家に対する貢献は甚だ大きいものがある。それよりも、偶然ではあったであろうが、金子の品行方正から、政界腐敗のお手伝をしなかった消極的の功労に対して、国家は金子に深く感謝してよかろう。

金子は博聞強記、恰も大谷光瑞に髣髴たるものがある。大谷は、哲学佛学は勿論機械天文に至るまで造詣が深い。併し、悲しい哉これを消化し応用する才能が足らぬように思われる。そこへ行くと、金子は哲学佛学こそ学ばぬけれども、事業商売にかけては、何一つ知らぬことがない。のみならず、これを消化応用する術も心得ている。また、他人の説を聞いて直ちにこれを自説と融和させ、全くの自家の意見として吐き出すことが上手だ。たとえば、山下亀三郎が金子を訪問し、船舶のことに就て意見を述べると、金子は『へいそう』――金子は、他人が何か喋る時は、必ず『へい、そう』を連発するので有名だ――と聞いており、直ちにその説のよい所を採って自分の頭にあるものと組合せ、次に勝田銀次郎が来ると、自分と山下との説の化合物を自説の如く滔々と勝田に講釈する。そして勝田が喋ると、例の『へい、そう』を連発して聞いている。その次に松方幸次郎が来ると、自分と山下との化合物に勝田の分を混和して、松方をまくし立て、成程と感心させて帰す。その喋り方たるや実に堂に入ったもので、理路整然一糸乱れざる名調子である。

現今、東京に於ける座談の雄は、何と言っても杉山茂丸と島田俊雄の両者であるが、この両者は、談話中にチヤリ滑稽が混るから真面目の談判には不向きだ。又、大正十四年一月の我国の貿易は、輸出一億八千百六十七万、輸入二億四千八十二万六千、差引五千九百十五万六千円の入超などと、細い数字まで並べ立て、堅白異同の弁を弄する者に山本条太郎があるけれども、富士山の高さは海抜一万二千四百六十七尺四寸が正しいのに、一年即ち十二月三百六十五日と覚えて置けばよいと信じて、その高さは一万二千三百六十五尺と説明して得々たる者のあるように、山本条太郎輩の数字には、往々出鱈目があるから、具眼者ならば、マタ例の法螺かと相手にしない。だが金子は、綿密に

精確に取調べて記憶しているから、細い数字を列挙しても、僅かも誤りがない。即ち『アルゼンチン』の港『ブエノスアイレス』からドイツの『ハンボルグ』まで六千六百一浬だから、国際汽船の百合丸もしくは八重丸（各一万屯級の船で速力十浬～十一浬）を以ってすれば、何隻で何日間に、何程の小麦が運べるかをハッキリいう。また、米国『ニューオルリアンス』から英国『リバープール』まで四千五百三十二浬、『ガルベストン』から四千七百二十六浬だから、以上の船ならば何日で何程の棉を送れるか。また、『ブエノスアイレス』は『ラ、プラタ』の河口にあり水深二十六呎、『ニューオルリアンス』は『ミスシッピー』の河口水深三十呎、又『ガルベストン』はこれら両港に比し一層雄大で、縦横の桟橋合せて三十二本、水深三十五呎、遠洋航海船同時に百隻を繋船することが出来る等の事まで詳細に説明する。だから、単に相手を感服させるのみならず、応対談判に敗をとったことがないという。これ皆、金子が少年時代、質屋奉公中に胸算用で割出すコツを会得した賜である。

金子は、須磨にある支那風の粗末な西洋館に住んでいる。一ケ月の経費は、驚く勿れ、僅かに九十円。例の品行方正で他人の情を汲取ることを知らぬから、他人も自分同様で暮して行けるものと思った故か、鈴木商店の店員の給料は他に比して低かった。故に、鈴木没落の今日、一人として安楽に後日を送り得る程の貯蓄の出来たものはない。然らば店員は何故薄給に甘んじてよく働いたかというに、鈴木の事業商売がドシドシ拡張されて行く、その面白さにツイ曳きずられていたものと察せられる。

と言う風で、相当の人物もあっただろうが、金子の外に名の知られた者は、ロンドン支店長を勤めた高畑誠一位のものだ。藤田謙一、金光庸夫、長崎英造等相当世間に名を売った者もあるにはあるが、これ等みんな外様で子飼いの店員ではない。

三井物産は、明治九年に創立され、今日に至るまで、その間五十有余年、事業の発達に伴い人材も出来た。鈴木は大戦勃発後、短時日の間に俄に大きくなったもので、人物がこれに伴わなかった。これも失敗の一原因ではある。

金子は大の寒がり屋だ。平素着ているラクダの背広には、裏に真綿が入れてあり、シミッタレに似合わず、一着二百円位奮発した高価のものだ。粗服を着ているなどと、軽蔑するのは間違っている。

金子は湯が大嫌いで、入浴は月に一度位。それから又扇風機が大嫌いとある。山下亀三郎は、この呼吸を呑込んでいるから、金子との談判にタジタジと来ると、早速扇風機を金子の方に向けて金子を降参させる。

鈴木丸は、すでに暗礁に乗り上げて沈没した。船長金子は、これが引揚げに日夜腐心している。さて愈々浮き上った時、何程の貨物が残るか。また、金子は従前通りこの船に乗って航海を続けるか。将又政界に乗り出して日本丸の船長となるか。もしくは佛門に入って衆生を済度するか。或は伯夷叔齊となって深山に隠遁するか。こればかりは解けぬ謎である。

金子は、碁将棋書画骨董等の道楽がない。詩も作らぬ。歌も詠まぬ。時々発句はやる。大正十一年の春、窮迫の結果、銀行に頭を下げざるを得なくなった時のこと、金子の心も知らず無心に咲誇る窓外の花盛りを見て、

背水の陣屋を囲む桜哉

と唸ったものだ。

これがなければ、金子は一層よい男なんだが…、珠に疵か疵の珠か。

（柘山寿郎氏 提供）

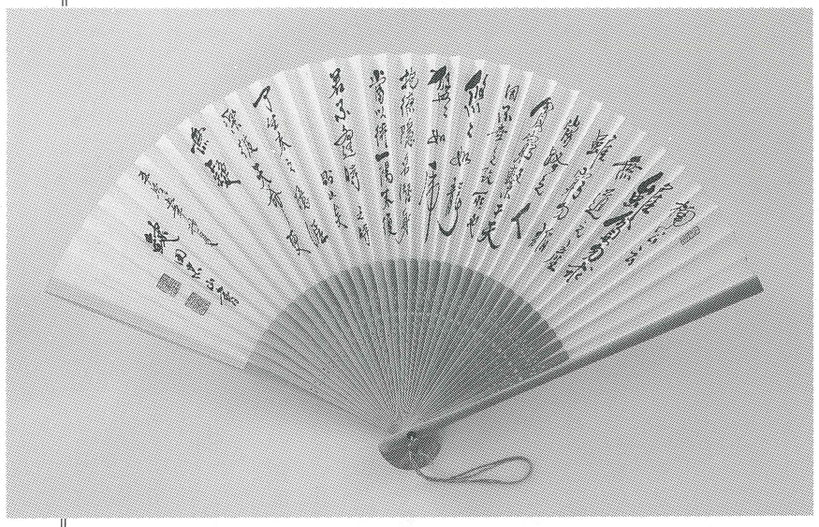
私の常在教訓

安東 浄

在るお方が、安東さんは春夏秋冬年がら年中扇子をもっておられますが、暑いのですか、とたずねられる。いや、私は正義感が旺盛で、いつも燃えていますよと、笑い話となる。

この扇子には大楠公が四条畷で父子別離の時に申しわたされた遺訓がかいてあります。

私はいつも拳拳服膺させて戴いております。

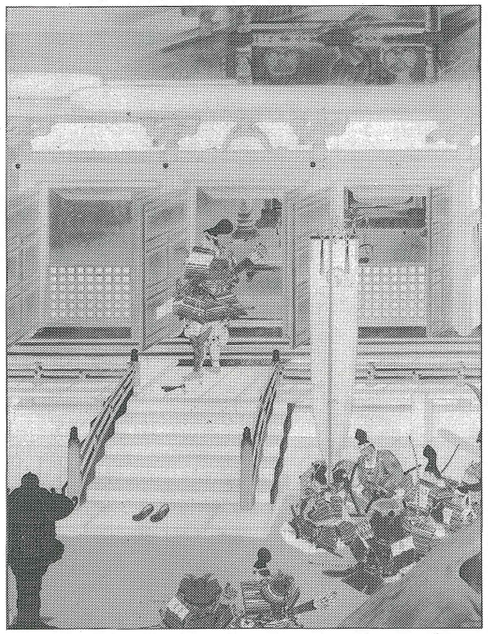


大楠公の遺訓

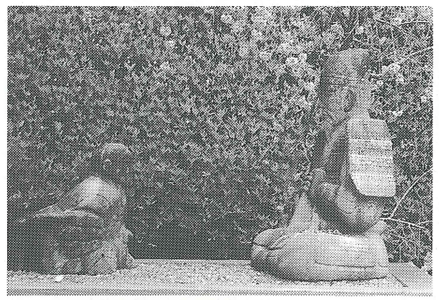
貧すると雖ども、無道の産を求むること勿れ。窮すると雖ども、当路之人にへつらうこと勿れ。貧窮は天にかゝる。因より不幸の致すところなり。悠々、龍の如く、猛々、虎の如く。徳を抱き、名を隠し、身を潜め、まさに以て、一陽来福の時を待つべし。もし時に逢わざれば、即ち止まん。彼の天命を楽しんで、さらに疑うこと無し。

楠政成が正行に遺した訓である。

楠家伝七巻書 にある。



楠木正行公辞世の歌を残す（植中直斉筆）



如意輪寺石像（楠父子の別れ）